

# “The £1,000,000 Bank-Note” の中のもう一つの物語

—— 揺らぐ Self-Made Man の言説

筑 後 勝 彦

平成 27 年 6 月 15 日受理

Another Narrative in “The £1,000,000 Bank-Note”:  
The Discourse of the Self-Made Man Undermined

Katsuhiko CHIKUGO

## 目 次

1. はじめに
2. Adams の最後の言葉に隠されたメッセージ
3. 冷酷な資本家 Adams の誕生
4. Henry Adams と Mark Twain と Brother B
5. おわりに —— 揺らぐ Self-Made Man の言説

### 1. はじめに

サンフランシスコの鉱山株式仲買店の店員 Henry Adams<sup>1</sup> は、事故のため無一文でロンドンにたどり着く。当てもなくポートランド街を歩いていると、なぜかある家に招き入れられ、封筒を手渡される。見ると、中には百万ポンド紙幣と Brother B の手紙が入っている。手紙には、“[A sum of money] is lent to you for thirty days, without interest. Report at this house at the end of that time. I have a bet on you. If I win it you shall have any situation that is in my gift — any, that is, that you shall be able to prove yourself familiar with and competent to fill” (64) と書いてある。聡明な Adams はその紙幣を元手に大金を手に入れ、Brother B に自分の才能を示し義理の娘 Portia との結婚を願い出る。

Mark Twain の 短 篇 小 説 “The £1,000,000 Bank-Note” (1893) は、聡明で正直な若者がロンドンで機知と汚れない評判によって大金を手に入れるが、決して金銭に支配されること

なく、金銭より大切な人生の伴侶と巡り会い、幸せをつかむ物語であると考えられている。たとえば、R. Kent Rasmussen は “[‘The £1,000,000 Bank-Note’] is generally good-natured and has a happy ending” (339) と言う。James D. Wilson は Ricki Morgan を引用しながら、“Henry Adams, the Adamic hero of ‘The £1,000,000 Bank-Note,’ successfully withstands the temptation of money; he achieves prominence . . . ‘not through his own greed and money worship, but through the greed and money worship of the society surrounding him’” (226) と述べ、“Adam(s), because of his character and ingenuity, resists the satanic temptation to win his Eve and paradise too” (227) と続ける。

Twain は、1879 年にはすでに構想を練っていたこの短篇小説を、イタリアのフローレンスに滞在していた 1892 年に執筆し、1893 年 1 月、*Century Magazine* に発表した。そして、1 か月後には Charles L. Webster and Company から *The £1,000,000 Bank-Note and Other New Stories*

を出版した (Rasmussen 316). 合衆国のこの時代は、Horatio Alger, Jr. が「誠実かつ正直な人間は、必ず社会的に認められるという大前提の上に」(渡辺 161) *Ragged Dick* (1867) をはじめ、貧しい少年の成功を讃美する小説を数多く執筆した時代<sup>2</sup>、Andrew Carnegie が “The Gospel of Wealth” (1889) や “How to Win Fortune” (1890) を発表し、*The Empire of Business* (1902) を出版した時代であり、いわゆる “self-made man” (以下、セルフ・メイド・マン)<sup>3</sup> の言説が流通する時代であった。したがって、“The £1,000,000 Bank-Note” もその時代風潮に影響を受けたことは想像するに難くない。また、1893年には経済恐慌が起き、南北戦争後の “Gilded Age” も終焉を迎えるが、同テキストが同時代、そしてのちの時代において多少なりともセルフ・メイド・マンの言説の流通にかかわった可能性があることは否定できない。

だが、“The £1,000,000 Bank-Note” は本当にセルフ・メイド・マンの言説を擁護する単なる「成功物語」<sup>4</sup> なのだろうか。

Peter Messent は “If Adams remains a hero, it is not because of the money that he makes or the way that he makes it, but the fact that such activity does not consume his mind and heart” (125) と言いながら、Adams の言動に違和感を覚える。

Adams’s love for his wife and her central role in his life are clear. But to place the symbol of enormous wealth in a “sacred” place in the house and to describe his wife in terms of commercial and financial exchange (an “article” bought at bargain price) hints that the market may now make the man. (125)

Messent が覚えた違和感は、特にこの物語の最終段落による。Adams と Portia の家の最も神聖な場所には額に入れられた百万ポンド紙幣が掛けてある。Adams はその理由を、百万ポンド紙幣が彼に Portia を与えてくれたからと述べているが、それでも百万ポンド紙幣は巨額の

富の象徴である。その上、Adams は最愛の Portia を安値で手に入れた「品物」であると表現している。そのため Adams がマーケットに支配されているのではないかと、Messent は疑いを抱くのである。

やはり、“The £1,000,000 Bank-Note” は単なる成功物語ではない。聡明で正直な若者が機知と汚れない評判によって大金を手に入れるが、決して金銭に支配されることなく、金銭より大切な人生の伴侶と巡り会うという物語の裏には、その若者が金銭の崇拜者になっていく様子を描いた、もう一つの物語が隠されている可能性がある。だから Messent はその一部、いわば氷山の一角に気づき、違和感を覚えたのだ。

本稿の目的は、“The £1,000,000 Bank-Note” の Adams の語りの裏に隠されたもう一つの物語を前景化し、そのテキストが影響を受け、擁護するセルフ・メイド・マンの言説が、テキスト中で揺らいでいるのを確認することである。

## 2. Adams の最後の言葉に隠されたメッセージ

語り手の Adams は物語の最終段落で次のように言う。

My Portia’s papa took that friendly and hospitable bill back to the Bank of England and cashed it; then the Bank canceled it and made him a present of it, and he gave it to us at our wedding, and it has always hung in its frame in the sacrest place in our home ever since. For it gave me my Portia. But for it I could not have remained in London, would not have appeared at the minister’s, never should have met her. And so I always say, “Yes, it’s a million-pounder, as you see; but it never made but one purchase in its life, and *then* got the article for only about a tenth part of its value.” (80)

この段落は、語り手 Adams の話 (回想) の中に、主人公 Adams の言葉を引用する形になっ

ている。<sup>5</sup> おそらく、Adams は訪問客にいつも百万ポンド紙幣を見せ、説明をしていたのだろう。<sup>6</sup>

さて、ここで問題となるのは、語り手 Adams が引用している主人公 Adams の最後の言葉（以下、Adams の最後の言葉）は何を意味するのか、百万ポンド紙幣が買った“the article”とは何か、ということである。<sup>7</sup> Rasmussen は“Though the note is a million-pounder, Adams considers its value only a tenth the worth of what it has bought him” (341) と述べ、Adams が百万ポンド紙幣の価値を“the article”の10分の1でしかないと考えている、と指摘する。しかし、残念ながら“the article”が何なのかは明らかにしていない。それに対し、Messent は“Portia, whom [Adams] marries, holds ten times more value for him than the bank-note that led him to her and facilitated their relationship” (125) と述べ、“the article”が Portia であることを示唆する。

では、百万ポンド紙幣はいつ Adams のために Portia を買ったのか、言い換えれば百万ポンド紙幣はいつ Portia と交換されたのか。Adams は Brother B に、“The only use I made of [that little loan you let me have] was to buy trifles and offer the bill in change” (78) と述べ、百万ポンド紙幣の使い方が、つまらない物を買って釣り銭を要求することだけだったと言っている。考えられる唯一の機会、Adams が Brother B に百万ポンド紙幣を返却し、Portia との結婚を許してもらったときであるが、すっきりした説明とは言えない。

さて、ここで“*The £1,000,000 Bank-Note*”の邦訳が、Adams の最後の言葉をどのように翻訳しているか見てみたい。

1960年に出版された上野直蔵訳は、「そうです、これは御覧の通り、百万ポンド紙幣です。しかし、有効期間内にただ一度もこれでものを買うことが出来ませんでした、しかし有効期間が終わってから、その十倍も値打のあるものを私に与えてくれました」としている。“the article”が何を指すか明らかにしてはいないが、Ras-

mussen や Messent と同様 “a tenth part of its value” が “a tenth part of the article’s value” を意味する、すなわち、百万ポンド紙幣が “the article” の価値の10分の1でしかない、言い換えれば、“the article” は Adams にとって百万ポンド紙幣の10倍の価値があるということを前提に翻訳してある。特徴的なのは、“... it never made but one purchase in its life...” を「有効期間内にただ一度もこれでものを買うことが出来ませんでした」、そして“then”を「そのとき」ではなく、「有効期間が終わってから」と訳していることである。それによって、百万ポンド紙幣の使い方はつまらない物を買って釣り銭を要求することだけだった、という Adams の言葉と食い違わないようにしている。また、Messent と違い、“the article” が何なのかをはっきりさせないことで、Portia の商品化を避けている。

1961年に出版された新潮文庫の古沢安二郎訳は、「そうです、ごらんのとおり、これは百万ポンドの紙幣です。でもこの紙幣は、紙幣としての生涯のあいだにたった一度しか買い物をしなかったのです。しかもその買い物をしたときは、額面のたった十分の一くらいでその品物を買ったんですよ」としている。“the article”を単に「その品物」と訳し、それが何を指すのか示していない。特徴的なのは、“a tenth part of its value”を「額面のたった十分の一くらい」と訳して、“its value”を“the million-pounder’s value”，すなわち「百万ポンド紙幣の価値」と捉えていることである。<sup>8</sup>

1976年に出版された佐山栄太郎訳と1994年に出版された勝浦吉雄訳は、“the article”について独自の解釈をしている。前者は「そうです、ごらんのようであれが百万ポンド手形です。しかし、それはその生涯に唯一の買物しかなかった、が、その一度の時には僅かにその額面の十分の一くらいでその品もの（訳注・この主人公のこと）を買ったのであった」としている。後者は、「そうです、ごらんのようであれが百万ポンド札です。しかし、それはその生涯で

たった一つの買物しかなかった。が、その一度の時に、その額面のわずか十分の一ぐらいでその品物〔訳注＝この主人公のこと。〕を買ったのです」と訳している。

この二人の翻訳者は“the article”が主人公、すなわち Adams を指すと訳注に記している。なぜか、誤訳ではあるまい。彼らは、Adams が百万ポンド紙幣に支配されていることを見抜いていたのだ。

では、“the article”が Adams を指すとすると、百万ポンド紙幣は誰のために Adams を買ったのか。答えはただ一つ、Brother B のためである。Adams は Brother B の自宅に招き入れられたとき、Portia の花婿候補として百万ポンド紙幣と交換された。そして、Rasmussen や Messent が言うように百万ポンド紙幣が“the article”の10分の1の価値しかないというのであれば、Adams は物語の最後に、自分が Brother B にとって一千万ポンドの値打ちがあった、と暗に語っていることになる。

### 3. 冷酷な資本家 Adams の誕生

Adams が Brother B によって百万ポンド紙幣で購入されたとすると、“The £1,000,000 Bank-Note”の一般的な評価は揺らぎ始める。そして、Adams が百万ポンド紙幣を利用して社会的地位を獲得し、詐欺的な方法で大金を手に入れ、“I was as cold as a capitalist” (76) と言って示唆するように Brother B の義理の息子として冷酷な資本家になる、という裏の物語が前景化する。

もちろん、Adams 自身、そのことに気づいている。この物語の中で Adams は、百万ポンド紙幣に魂を売り渡し、次第に金銭の崇拜者になっていくさまを自ら語っている、と言っている。

元来 Adams は、正直で堅実な若者である。ロンドンにたどり着く前、彼はサンフランシスコで鉱山株式仲買店の店員として働いていた。語り手の Adams は、“I was alone in the world, and had nothing to depend upon but my wits and a

clean reputation; but these were setting my feet in the road to eventual fortune, and I was content with the prospect” (60) と言っており、若い頃は“wit”と“a clean reputation”で財を築くことを思い描いていた。実際、ロンドンへ渡って鉱山株を売り一儲けしようとする Hastings に提示された好条件の誘いを断ったことから判断して、サンフランシスコ時代の Adams はまじめにコツコツ働いて金持ちになることを夢見ていたと考えられる。しかし、ロンドンで百万ポンド紙幣を手にとると、Adams はその力に気づき、次第に変わっていく。百万ポンド紙幣を見せ釣り銭を要求するだけで何でも手に入るとわかった Adams は、必要なものを買ひ揃え、高級ホテルで暮らし始める。百万ポンド紙幣を見せて釣り銭を要求するというやり方は、機知に富むが、明らかに詐欺的である。

その後、Adams は百万ポンド紙幣の力で名声を得る。その名声たるや、アメリカ公使館で開かれたディナー・パーティーで、Shoreditch 公爵と席次を巡り、言い争いができるほどのものである。

鉱山株の売却においては、Adams は、Hastings と株に興味を持つ投資家を欺いて20万ポンドを手に入れる。Adams は資本家のふりをして Hastings に“I don't need to buy mines; I can keep my capital moving, in a commercial center like London, without that; it's what I'm at, all the time . . . . I know all about that mine, of course; I know its immense value, and can swear to it if anybody wishes it” (76) と言う。しかし、Adams はその鉱山株がロンドンで売れないことをはじめから知っていた。Hastings は Adams に“I tried to persuade you to come to London with me, and offered to get leave of absence for you and pay all your expenses, and give you something over if I succeeded in making the sale; and you would not listen to me, said I wouldn't succeed” (71) と言っているのである。

Messent は、“Ironically, while the index of Adams's 'name' rests on an insubstantial base (for

he is a pauper), the Gould and Curry Company was (at least in the 1860s) ‘irreproachable’ and hugely successful” (124-25) と、実際の Gould and Curry 社の鉱山株が値上がりしたことを示唆する。しかし、この短篇小説の読者は、その鉱山株がのちに暴落したことを知っている。Twain は、1872 年に発表した *Roughing It* の第 58 章で次のように言う。

Gould & Curry soared to six thousand three hundred dollars a foot! And then—all of a sudden, out went the bottom and everything and everybody went to ruin and destruction! The wreck was complete. The bubble scarcely left a microscopic moisture behind it. I was an early beggar and a thorough one. (396-97)

Adams が資本家のふりをして購入を勧め、20 万ポンドを儲けた Gould and Curry 社の鉱山株は暴落するのである。多くの投資家が大損をしたのは間違いない。

さて、Adams が Brother B によって百万ポンド紙幣と交換されたとすれば、手紙の “I have a bet on you” (64) という一文から、彼は賭けのためのモルモットとして購入されたと考えられる。しかし実際は、Portia の花婿候補、すなわち Brother B の将来のパートナー候補として購入された可能性がある。Brother B は Adams への手紙に、“You are an intelligent and honest man, as one may see by your face. . . . If I win [the bet] you shall have any situation that is in my gift—any, that is, that you shall be able to provide yourself familiar with and competent to fill” (64) と書いている。なぜ Brother B は賭けに勝ったら金銭をやると書かなかったのか。Brother B ははじめから、能力に基づき Adams に相応の職を与えるつもりだったに違いない。結果はどうか。Adams は Hastings の鉱山株で儲けた 20 万ポンドの預金証書を提示し、資本家としての才能を証明する。そして、Brother B の義理の息子 (Portia の夫) という最高の地位を手に入れ

る。

もう一度 Adams の最後の言葉に戻る。Adams は百万ポンド紙幣が彼に Portia を買ってくれたと言っているが、同時に、百万ポンド紙幣が Brother B のために Portia の花婿候補として自分を買ったと言っている。また、投資家たちを欺き大金を手にした Adams が、自分は Brother B にとって百万ポンド紙幣の 10 倍の値打ちがあったと告白しているとすれば、それは Adams が資本家として成功したことを意味している。“The £1,000,000 Bank-Note” は、表面的には Adams が決して金銭に支配されることなく、金銭より大切な人生の伴侶 Portia と巡り会い、幸せをつかむ物語であるが、その裏には Adams が詐欺的な方法で冷酷な資本家になる過程が記されている。

#### 4. Henry Adams と Mark Twain と Brother B

ここで、Twain 個人のことに触れてみたい。Everett Emerson は “The £1,000,000 Bank-Note” を “a story probably inspired by the author’s need for credit as he was facing bankruptcy” (188) であると言う。Twain は James W. Paige の自動植字機に莫大な投資をしていた。<sup>9</sup> しかし、Charles H Gold によれば、パートナーである甥の Webster に任せていた Charles L. Webster and Company の経営が思わしくなく、そこからの収入が減って 1880 年代の終わりには自動植字機に投資することが難しくなってきた。Twain は出資者を探したが見つからず、1891 年には Paige との契約を断念 (Gold 44-45) し、自らも節約のため、家族とともにコネティカット州ハートフォードの豪邸を去り、ヨーロッパに移り住んだ。とすれば、Twain の金銭や成功に対する欲求は、作中人物 Adams に投影されていたと言えるだろう。

その後、Paige の自動植字機は 1892 年に *Chicago Herald* (新聞社) に据え付けられたが、失敗に終わる (Gold 40)。1894 年には Charles L. Webster and Company が倒産する。Twain は

Webster と Paige を非難した。Gold によれば、Twain は “Webster let [him] down . . . by mis-managing the affairs of the publishing company. Paige dashed his dreams by failing to deliver a finished and manufacturable machine” (Gold 11) と考えていたという。

Twain は富を求めている。Gold は “Clemens wanted to be rich. He saw no reason why he should not himself be a Gould, a Carnegie” (6) と言う。また、William Dean Howells は “Money was Clemens’s dream” (cited in Gold 13) と言う。この短篇小説を執筆していたとき、Twain に必要なものは資金を供給してくれる有能なパートナーだったに違いない。その意味では、Twain の個人的な欲求は作中人物の Brother B に投影されている。というのも、Brother B は Adams という有能なパートナーを見つけ出したからである。

## 5. おわりに——揺らぐ Self-Made Man の言説

すでに述べたように、Twain が “The £1,000,000 Bank-Note” を執筆したのは、セルフ・メイド・マンの言説が流通する時代である。その時代風潮を反映するかのようには、物語中、二人のアメリカ人はともに成功することを夢見る。Adams は百万ポンド紙幣の力を借りて名声を得たときのことを、“I was a made man, now; my place was established” (68) と回想しているし、Hastings は鉱山株の販売に Adams の名前を使ってもよいと言われたとき、“I’m a made man, I’m a made man forever” (77) と歓喜する。

渡辺は「成功讃美は、長く強固な伝統を有する。(中略) 一八世紀のフランクリン、一九世紀のアンドルー・カーネギーなど、数多くの支持者によって再確認され、主張され、現代にまでいたっている。文学の世界でも、通俗作家、少年小説家たちによって、魅力的に美化され、宣伝されてきた」(193-94) と指摘する。成功することを夢見る聡明で正直な主人公 Adams

が自分の才能と幸運によって富を手に入れ、最愛の女性と巡り会い、最後に、その女性が百万ポンド紙幣の 10 倍の価値があったと言ってエンディングを迎えるのであれば、“The £1,000,000 Bank-Note” は当時のセルフ・メイド・マンの言説を擁護していたと言える。

しかし同時に、この短篇小説には裏の物語が存在し、テキスト中のセルフ・メイド・マンの言説を揺るがしている。Brother B に百万ポンド紙幣で購入された主人公 Adams が、詐欺的な方法で富を手に入れ、冷酷な資本家としての才能を示すことにより、Brother B の義理の息子の地位を獲得し、Brother B にとって百万ポンド紙幣の 10 倍の値打ちのあるパートナーとなったという事実を Adams 自身が語っているとしたら、「誠実かつ正直な人間は、必ず社会的に認められるという大前提の上に」(渡辺 161) 成立している Horatio Alger, Jr. の小説の主人公とは大きく異なる。

もちろん、作者 Twain もその二重性に気づいていたに違いない。Twain はこの成功物語に二重の意味を持たせ、一方で讃美され、他方で「ロバー・バロン」(飯塚 113-14) と呼ばれたセルフ・メイド・マンたちの姿を示そうとしたのではないか。

渡辺は、「カーネギー、ヴァンダービルト、ハンティントンなど、代表的な『セルフ・メイド・マン』は、自分たちの存在、自分たちの生涯に疑問を抱くことはおそらくなかっただろう。彼らは超人的な努力でみずからの野望を達成したのであり、自分の生涯を誇示こそすれ、恥じるころはまったくない」(191) と言う。さて、詐欺的な方法で資本家としての才能を示し、Brother B にとって百万ポンド紙幣の 10 倍の値打ちがあるパートナーになった、と告白する Adams は、それまでの自分の人生を振り返って、その成功をどう感じたのだろうか。

## 注

1. Mark Twain (1835-1910) と同じ時代を生きた、

- 実在の Henry Adams (1838-1918) は、第 2 代大統領を曾祖父に、第 6 代大統領を祖父に持つ名門の出の文筆家であり、後述するような成功を讃美する当時の時代風潮には批判的であった。Twain が主人公を Henry Adams と名づけたことについては、Charles L. Crow がその理由を推測している (LeMaster and Wilson 515)。
2. Horatio Alger, Jr. (1832-99) は生涯に 130 篇以上の成功物語を執筆した (渡辺 160)。代表作 *Ragged Dick* は、1867 年 5 月 5 日に出版されたあと、2, 3 週間で数千部が売れ、同年 8 月には第二版が出た。なお、この本は 20 世紀初頭にもっともよく売れた (Alger x-xi)。
  3. 「逆境の中からみずからの努力と幸運によって社会的に頭角を現わし、正規の教育こそ受けていないが、独学によって生まれもった自分の才能を十二分に発揮する人間」(渡辺 57) のこと。
  4. 「貧しい環境、ことに地方に生まれた若者が、経済的あるいは、もっと広い社会的な意味での成功を求めて大都市に飛びだし、みずからの努力と幸運によって成功する、あるいはその過程で挫折する物語」(渡辺 156) のこと。
  5. “The £1,000,000 Bank-Note” は、語り手 Adams の自伝的な物語である。自伝的な語りについて、Gérard Genette が “. . . we could expect to see the narrative bring its hero to the point where the narrator awaits him, in order that these two hypostases might meet and finally merge” (226) と指摘するように、語り手 Adams は若い頃の自分の話から始めるが、最終段落で主人公 Adams と融合する。
  6. *Pall Mall Gazette* 紙の Raymond Blathwait がインタビューのため、1891 年にコネティカット州ハートフォードの Twain の家を訪れたとき、Twain は額に入れて壁に掛けてある 45 万ドルの小切手を彼に見せている。これは、Ulysses S. Grant の回想録に対して、Twain の経営する Charles L. Webster and Company が支払ったものである。Adams の家の最も神聖な場所に額に入れられ掛けられた百万ポンド紙幣のアイデアはここから来ている可能性が高い。Dempsey 3 を参照。
  7. Adams の最後の言葉については、“What the Million-Pound Bank-Note Gets: An Interpretation of Henry Adams’s Final Statement in ‘The £1,000,000 Bank-Note’” (『東北アメリカ文学研究』第 33 号) で詳しく論じた。
  8. 最終段落は、“it” と “its” が多用されているため、解釈が可能である。“its value” を “the article’s value” ではなく “the million-pounder’s value” と解釈したとき、「百万ポンド紙幣の価値の約 10 分の 1」が何を意味するかについては、“What the Million-Pound Bank-Note Gets: An Interpretation of Henry Adams’s Final Statement in ‘The £1,000,000 Bank-Note’” の第 2 節で論じた。
  9. 投資額は、Charles L. Webster の息子によれば約 30 万ドル、Albert Bigelow Paine によれば約 17 万ドル。Gold 45 を参照。

### 参考文献

- Alger, Horatio, Jr. *Ragged Dick or, Street Life in New York with Boot Blacks*. Ed. Hildegard Hoeller. New York: Norton, 2008. Print.
- Chikugo, Katsuhiko. “What the Million-Pound Bank-Note Gets: An Interpretation of Henry Adams’s Final Statement in ‘The £1,000,000 Bank-Note.’” *Tohoku Studies in American Literature* 33 (2010): 21-31. Print.
- Dempsey, Terrell. *Searching for Jim: Slavery in Sam Clemens’s World*. Columbia: U of Missouri P, 2003. Print.
- Emerson, Everett. *The Authentic Mark Twain: A Literary Biography of Samuel L. Clemens*. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 1984. Print.
- Genette, Gérard. *Narrative Discourse: An Essay in Method*. Trans. Jane E. Lewin. Ithaca: Cornell UP, 1980. Print.
- Gold, Charles H. *“Hatching Ruin” or Mark Twain’s Road to Bankruptcy*. Columbia: U of Missouri P, 2003. Print.
- LeMaster, J.R., and James D. Wilson, eds. *The Mark Twain Encyclopedia*. New York: Garland, 1993. Print.
- Messent, Peter. *The Short Works of Mark Twain: A Critical Study*. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 2001. Print.
- Rasmussen, R. Kent. *Critical Companion to Mark Twain: A Literary Reference to His Life and Work Vol. I*. New York: Facts On File, 2007. Print.
- Twain, Mark. “The £1,000,000 Bank-Note.” *Mark*

- Twain: Collected Tales, Sketches, Speeches, & Essays 1891-1910*. Ed. Louis J. Budd: New York: Literary Classics of the United States, 1992. 60-80. Print.
- . *Roughing It*. Berkeley: U. of California P, 1993. Print.
- Wilson, James D. *A Reader's Guide to the Short Stories of Mark Twain*. Boston: Hall, 1987. Print.
- アンドリュー・カーネギー『カーネギー自伝』坂西志保訳, 中央公論社, 2002年.
- 『富の福音』田中孝顕監訳, きこ書房, 2011年.
- 飯塚英一『若き日のアメリカの肖像——トウエイ  
ン, カーネギー, エジソンの生きた時代』  
彩流社, 2010年.
- マーク・トウエイ「百万ポンド銀行券」『マーク・  
トウエイ短編全集(中)』勝浦吉雄訳, 文  
化書房博文社, 1994年.
- 「百万ポンド紙幣」『キャラベラス郡の名高き  
跳び蛙』上野直蔵訳, 南雲堂, 1960年.
- 「百万ポンド紙幣」『マーク・トウエイ短編集』  
古沢安二郎訳, 新潮社, 1961年.
- 「百万ポンド紙幣」『マーク・トウエイ短篇  
全集3』佐山栄太郎訳, 出版共同社, 1976年.  
渡辺利雄『フランクリンとアメリカ文学』研究社,  
1980年.